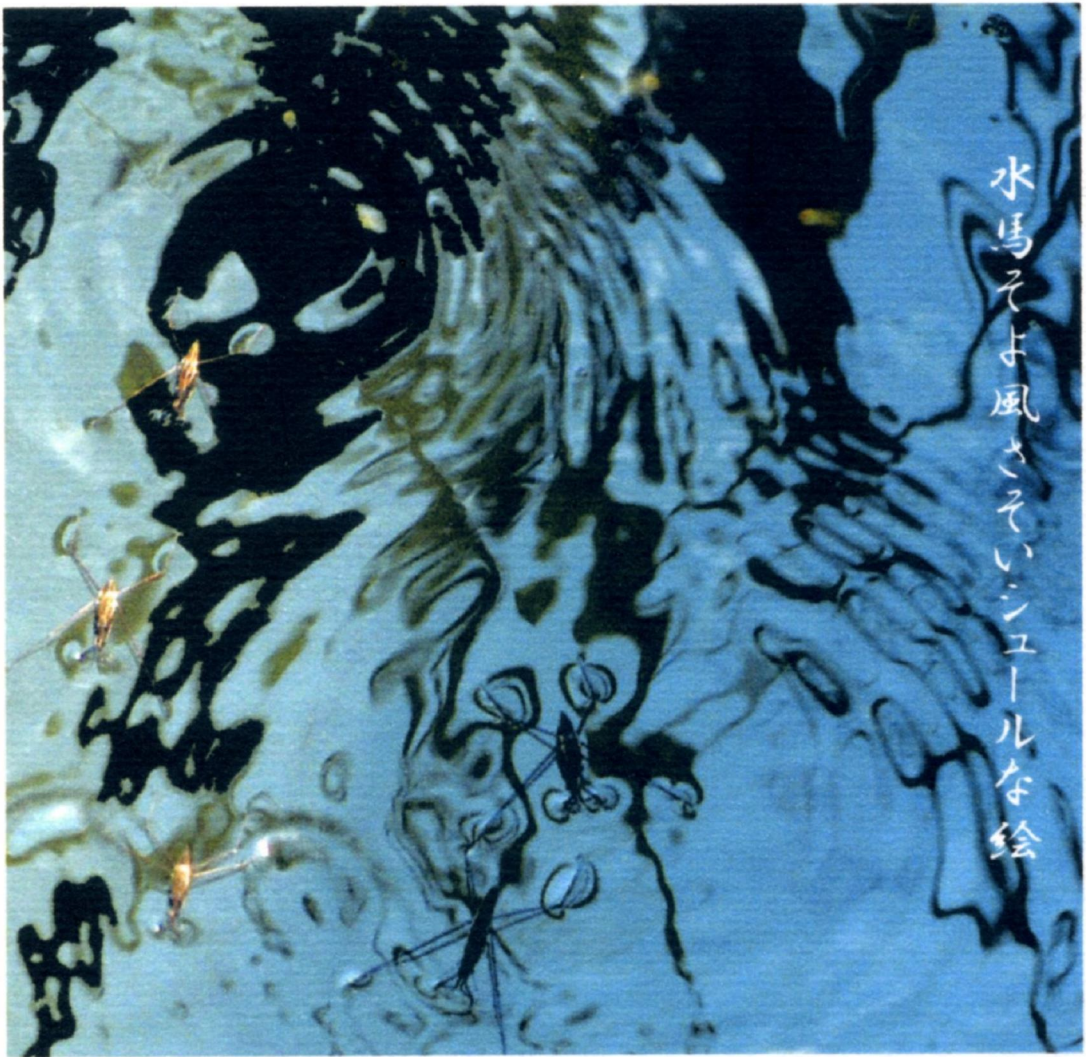


写真と文と俳句



水馬そよ風さそいシユールな絵

藤井 醇

写真と文と俳句

はじめに

身近な昆虫を中心に、
馴染みのある、小動物
鳥など、生き物たちに
纏わる話と拙い俳句と
写真で、一項目ずつ、
一頁く一見開き程度で
まとめました。
御覧頂ければ幸甚です。

斑猫（道おしえ）

ハンミョウについては日本を代表する詩人深尾須磨子（1888～1974）の詩「斑猫」にハンミョウの特徴がよく詠われているので、部分的にピックアップしてご覧頂く事にしました

誘われて

この道ひと筋

八十路かな 閑虫

斑猫です南の国の夏のさかりに
甘えふざけこびる斑猫です

夏涼し寶石遊ぶ

山の路 同

げ身をそらし・・・
尺ばかりつねにさきがけ・・・
斑猫です花よりもきれいな
宝石よりも・・・

詩人の経歴を改めて見て二度びっくりしました。

二回目の渡仏では生物学を修めたと記載されていたのです。脱帽です。





ヒヨドリよ漢字表記を吾はせず
矢になつてヒヨドリ垣に突き刺さり

閑虫
同

一句目はヒヨドリに呼びかけた句です。人間がヒヨドリに宛てた漢字の酷さに私は腹を立てているのです。卑しい鳥と書くのです。失礼極まりないと思いませんか。人間の驕りに呆れ返っているわけです。人間の中には卑しい奴もいますが、人間以外に卑しい生物など存在しません。二句目はヒヨドリの飛翔のさまを矢に例えました。団地内には幾組ものヒヨドリが棲んでいます。時に巢からこぼれた雛がムクドリやカラスに食われてしまう事もあります。これは自然界の事です。可哀そうでも人が介入してはならないことです。しかし、襲われる以前に落ちた雛を見れば助けてやり、一人前になったら、自然に返してやるのが人の情というものでしょう。

巣からこぼれたヒヨドリの雛

家人が一階のエレベーター近くに
ヒヨドリの雛らしいのがあるので見て
くれと云ってきた。

ちよつと手を出してみたが逃げる気配
も見せないの、とりあえず飼うこと
にした

簡略に記すが、考えてのことである。



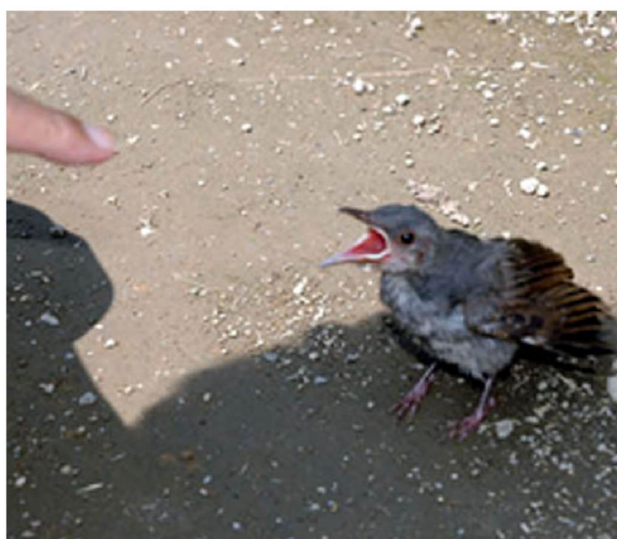
一度は飼われていた様なので考えた末
バナナと茹でた卵黄をつぶした練り餌
を与えた。とにかく愛らしい。

順調に成長したので放鳥の時期が近付
いてきた。別れが辛くなってきた。

籠の蓋を開け促す。しばらく考えてい
たが間もなく地面におりた。



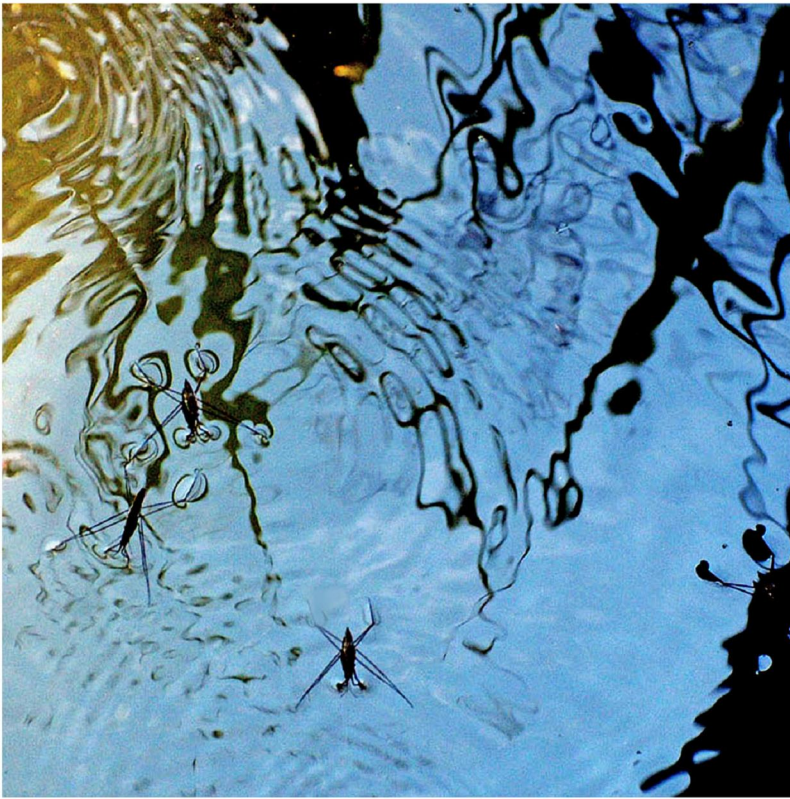
やがて、地面にいるアリなどをつつき
自分で餌をとることも確認出来た。羽
ばたいて少しずつ飛べるようなので放
鳥に成功したと思った矢先、写真のよ
うに甘えてこられると別れがたい。
後ろを振り向かないようにして、ここ
らから別れを告げた。



アメンボウ（水馬）

風うらら水馬誘い墨流し 閑虫

水馬水面にシユールな絵を残し 同



生態写真の分野は常に正攻法で撮り自然を再現しなければならぬから、上の写真のような絵柄は稀である。これも自然の実写である事に間違いはない。しかし、画面があまりにもシユールだ。

それでこんなことを考えてしまった。

一般の俳句の世界の人はどんな句を詠んでいるか、覗いて気に入った句を取り上げさせていただいた。

水馬流れんとして飛びかへる 子規

川上へ頭そろへて水馬 子規

水馬踏ん張って居る笑窪かな 三浦光芳

あめんぼう俊敏にして自在なる 柿苗義ひろ



アメンボウの二対の脚は長く水面を踏ん張って、浮いたり、走り回る役目をしていますが、前脚は水面の振動を捉える役目と、水面に落ちた虫などを捕らえる役を果たす形に変化しています。



水面に落ちた物へとにかく速くたどり着いて食べられるものであれば早速捕え鋭い針状の口で体液を吸います。
二点の写真には一見三匹のように見えますがいずれもペアです。

写真（下）は落ちたミツバチを捕捉しています。腹部の外皮は堅そうですが、節と節の間に口を刺し込んで体液を吸っているようです。

テントウムシ

身近で見かけるテントウムシ類は主に左と下の二種だが、ナミテントウは紋様の変化が二〇タイプにも及び、ややこしく、見分けるのは無理でしょう。ご存知の通り、いずれもアリマキを退治してくれる有難い味方です。



ナナホシテントウ

ナミテントウ



下はニジュウヤホシテントウ。なすトマト、じゃがいもなどの害虫、写真はないが、もう一種うり科の害虫、トホシテントウがいるが、いずれも体色がくすんだ橙色で他の益虫テントウムシ類と区別は簡単です。

天道虫飛んで停まって

ペンダント 閑虫

天道虫小屋の扉に七つ星 同





ベランダのエノキの葉裏にテントウ
が来て産卵していききました。
「週間後に運良く孵化の場面を捉える
事が出来ました。」
ナミテントウの孵化の場面です。
「バンザイ」と
自ら祝う子虫たち 閑虫



右と下の写真はナナホシテントウの
幼虫と蛹です。



虻が蜂捕ることもあり万愚節 閑虫



「虻蜂取らず」という諺がある。

「二兎追う者一兎も得ず」とおよそ同義である諺とは全く関係ないことだが、昆虫の世界では写真でご覧の通り、虻が蜂を捕ることも稀にはあるのです。これ「虻蜂捕る」です。

ミツバチを襲って捕えたのはシオヤアブという虫取り専門の虻で、この仲間はムシヒキアブと呼ばれていて他に数種類います。

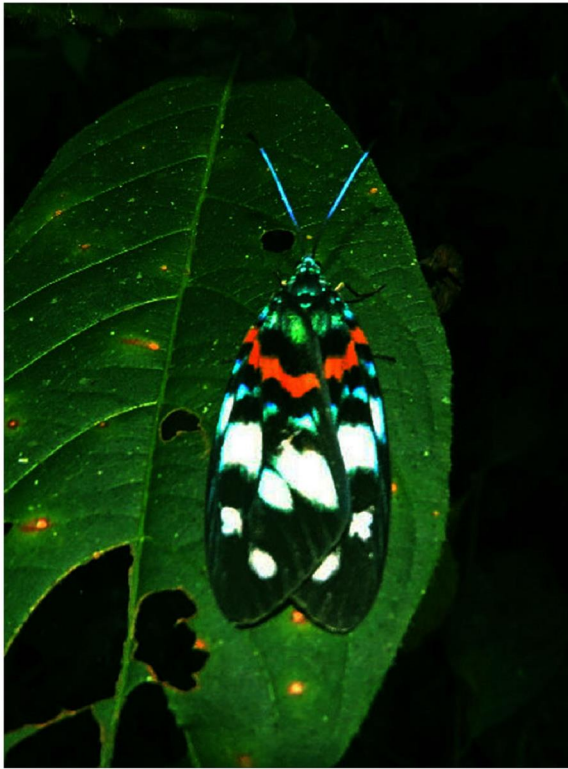
勿論、ハチが虻を襲う事もあるのでしようが目撃した事はなく、従って画像ありません。

この類の虻が、ガや、稀にはトンボを捕えているのも見かけた事があります。写真はガや、他の虫など捕食している場面が数点あるだけです昆虫の世界はなかなか世知辛く、虫たちが生き抜いてゆく事は大変なのです。

美しい昼の蛾

二〇一二年の四月台湾へ行った。大都會の台北は避け、高雄を後回しにして、市中から直ぐに豊かな自然環境へ行けそうな、台中を目指したその成果は大いにあつたが、中でも、左の

「サツマニシキ」と下の「ルリチラシ」という名前に違わぬ美しい昼の蛾は嬉しい収穫でした沖縄、八重山へは都合一〇回ほど通つたが逢う



サツマニシキ

薩摩の織物 豪華な帯地、「薩摩錦」から命名されている。

ことがなかった。
一句献じよう。

「ルリチラシ 雅な名もて真昼の蛾」 閑虫
嫌わるる蛾にしてその名ルリチラシ 同



ルリチラシ

雅な命名であるが、いわれは判りません。、

成人式

成人式が制定されたのは一九四八年。

一九三三年生まれの私が二十歳の時であるから成人式は存在したわけだが、何一つ記憶にないので「人間の成人式の話はやめる。

では、人間様以外に成人式はあるのかと言えば、私が決めたから、ある。最近の人間様の成人式より遙かに厳粛、見ているだけで感動ものである。

昆虫たちの「羽化」がそれである。

セミの羽化はわりあい多くの人が見ていると思う。

蝶も、アゲハチョウ・モンシロチョウなどの幼虫を幼稚園や学校で飼育して見た人も多い筈です。

つい、羽化を「誕生」と言う言葉に置き換えますが、厳密には誕生ではなく「成人式」がぴったり。

文字通り、幼虫は幼児期、そして蛹（ハイティーン）の時期を経て成人するわけです。

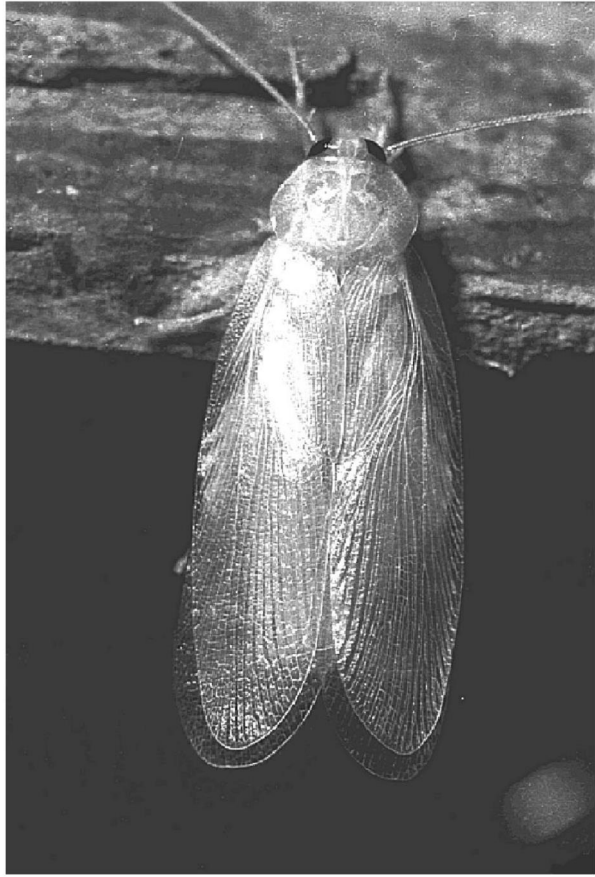
成人式の写真は、昆虫たちから依頼が多いので立会い、撮影する事が多い。

手に汗するような場面が多く疲れますが、良いショットが撮れた時は満足感で疲れなど吹っ飛びます。

左頁のゴキブリをご覧下さい。あのゴキブリがこの美しさですから。

成人式が済めば間もなく新郎が現れ、旅立ちを急かせます。

そんなわけで、虫たちの成人式の写真は数え切れぬほど持っています。自分の成人式は写真どころか記憶すら無いという、まあそんな時代であったのかもしれない。替わりに虫たちの成人式を祝って慶祝句を。

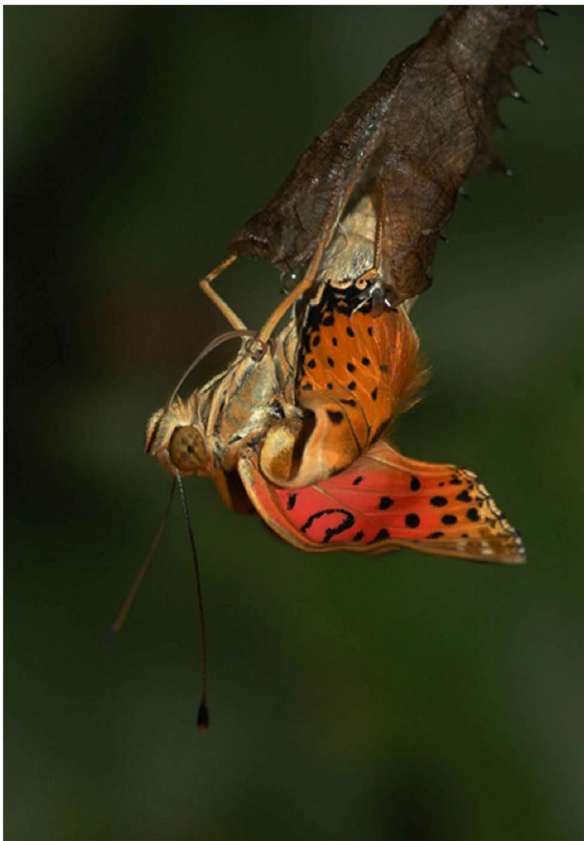


ゴキブリ

虫たちの羽化

厳肅な成人式

閑虫



ツマグロヒョウモン

清楚なる式服ごきぶり成人式 閑虫

豹柄に着替えし蝶の成人式 閑虫

ジョーズ

一〇年以上も前になるが、友人北野さんにあちこち連れて行って頂いた。

夏は直江津に近い魚市場へ行き新鮮な魚を求め、夕方我家に戻って宴が定番。

足を伸ばして富山、泊りだけで金沢といった按配で、楽しい思い出である。

普段でもデパート、スーパーの魚売り場は大好きで、見て歩く、それが漁港の近くの店であれば、なお更の事で、珍しい魚に、しばしば出会う。

下の写真は直江津近くの市場と記憶するが、かなり大きなジョーズの頭が三つほど置いてあり、珍しいのでカメラに収めておいた。

この市場の画像が二〇〇一年で映画「ジョーズ」は、一九七五年であるからこの時既に映画を見てから二五年も経っていたことになる。下に揚げた句は映画を観て、四十年後の俳句ということになる。



「夏涼しジョーズの大口魚市場」閑虫
「夏涼しジョーズの歯並び魚市場」同

「馬面にサソリの尻尾何奴か」閑虫

戯れ句の答えは

下の写真、シリアゲの一種ヤマトシリアゲ

初夏から夏の終わりまで里山の野原、林の下草などで普通に見られる、決して珍しい虫ではない。分類上では小さなグループで身近では数種類しかいないが個体数は多い。

顔は馬面でオスの尻尾はサソリのような形をしている。

小昆虫、弱った虫、死骸などを食している。

と云っても、体液を舐め吸っているのです。

卵・幼虫・蛹・成虫と四つの過程を踏む完全変体をする昆虫では最も古くから存在する昆虫で、生きた化石と言っても良いでしょう。

外見があまり魅力的でないせい、研究者は少ないようで情報の少ない昆虫です。



シリアゲや神のいたずら山笑う 閑虫

青蛙

元来日本人は色彩に関して大変デリケートで且つ、豊かな表現力を持っている。

青系の例で言えば、青色・水色・空色・浅葱色・藍色・群青色などなど、と使い分けている

にもかかわらず、明らかに緑色である数種の蛙に

「・・・アオガエル」と、命名している。

例えば、モリアオガエル、シユレーゲルアオガエルなどがあるが、個体数が少なく、目にする事が少ないので、画像を得ていない。



上の写真は正式にはアマガエルと命名されているが一般的には「アオガエル」と呼ばれている。アマガエルは鼻の先から黒いラインが前脚の付け根までであるのが特徴です。

アオガエルにはその黒いラインがありませんから

見分けは簡単ですが個体数が極度に少なく殆ど見られません。

それはおいといて、数年前のこと友人の畑に行つて、正真正銘青い蛙を見てしまった、ちよつと違和感を覚えたが、これこそ「アオガエル」と呼ぶべき体色であった（次頁の写真）

畑の主である友人に尋ねると、その畑には染色用の、

「藍」を二畝ほど作っている。それと関係がありそうだと言う。私も納得がいった。

「藍」の葉は、深い緑色であるが、よく見ると藍色が潜んでいるようだ。

生き物の多くは周辺の色彩に、影響され体の色を変えて身を守っていることはご存知のとおり。

二畝だけの藍の栽培であるから、全ての固体が影響を受けた訳ではなく、藍色に染められたのはほんの一部に過ぎず、多くはみどりのままであった。

芥川龍之介の、

「青蛙おのれもペンキぬりたてか」我鬼

この、ユーモラスな句があるのはご存知の通り。

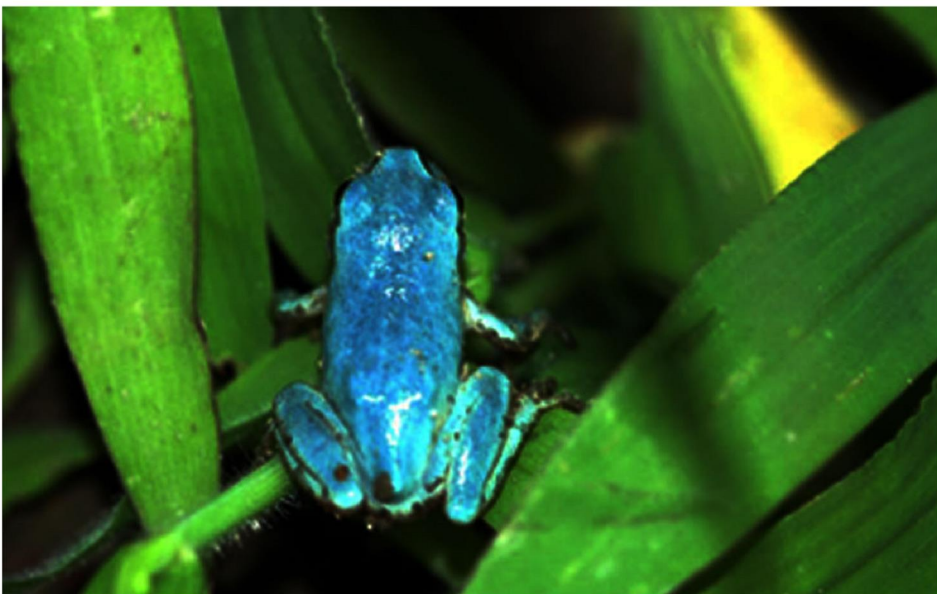
緑色のアマガエルが芥川さんに駄洒落も混ぜて返しました。

「龍之介おれさま青に塗りカエル」

これでは閑虫も負けてはいられません。そこで一句

藍の愛緑を藍に

染めにけり 閑虫



絵に描いた餅ならぬ花ヒラタアブ 閑虫

春から秋まで何処のお宅でも、何処から入ってくるのかしばしば虫の訪問客が現れるでしょう。

我家がよそのお宅と違うのは、客が、誰であるか知っているので、危険でない限りゆっくり滞在して頂く点である。

写真のヒラタアブの一種も、数日滞在していた。

食事時、好みの香りがすると、何処からともなく食卓に舞い降りてくる。ハナアブの一種ですから、不潔なことはありません。彼らの行動を観察するのは楽しいことで時に発見があることも。

ある朝、パン食の時舞い降りてきたアブはトーストのジャムにとまり、美味しそうに舐めていました

ふだん花の蜜や花粉を舐めていますから甘いものは好物です。

翌日もパン食でした。舞い降りてきたアブは写真の蓋付きのカップに舞い降り描かれた花にとまりました。

早速傍にあった携帯に収めました舌でなめても何の味もしないのであちこち歩き始めました。

このままでは、気がとがめますしご褒美の意味をこめて、ガーゼに薄めた蜂蜜を含ませて与えました。その場面カメラに収めるのを忘れてしまったようですが、十日後、別のアブがやってきたので、しっかりおさめました。
写真下



ミズカマキリの旅立ち

体型はカマキリそっくりで、水中で暮らすのでミズカマキリと名付けられているが分類的にはカメムシなどに近い仲間である。

左写真は水中から出てきたところで、体が濡れているのが判る。睡蓮の葉上上がり体が乾くのを待ちます。



左下の写真では完全に乾いているのが判ります。

六月の好天の日でしたから、この間、約十五分。

間もなく飛び立ちましたが、その初速は速く、カメラにはおさまりませんでした



ミズカマキリが新しい池をもとめて移動する事は知識として勿論知っていましたが、また飼育層の中で目撃はしていましたが、自然の中での行動としては初めて見る光景でした。飛行の速さは、想像を遥かに超えるもので、驚き同時に感動しました

旅立ちの準備万端

ミズカマキリ 閑虫

夏空のミズカマキリを

眺めけり 同

神の域エダナナフシの隠れ技



昆虫たちの迷彩色、擬態については先刻ご存知と思いますが、この画像に隠れているエダナナフシを自然の中で見つけることは事は難しい。

画像では、おおよそ中心あたりを見ればいることが判っていますからお判りになるでしょうが、六本の脚は、それぞれ何処に存在するかを見極めるにはちよつと時間がかかる事でしょう。

それはさておき、ナナフシの間はちよつと変っています。

単為生殖とって、オスがいないくてもメス単独で繁殖できるので昔、沢山飼ったことがあります。オスの固体が生まれてきません。メスは枝の上からばらばら植物の

種子状の卵を産み落とし孵化した幼虫は好みの葉、或いは花びらを食し成長し全て母親になるのです。日本には本種の他に、ナナフシ・オオナナフシなどがいます。

一種だけ、翅を持ち、飛翔可能なトビナナフシというのがいます。熱帯には三〇センチを超える種もいるようです。

単為生殖で増え、身を隠す術は優れています。武器は永久放棄の平和主義です。近縁のカマキリは武器を持ち戦う道を選びました。さて、どちらが、より生き延びるのででしょうか？

書留の小箱開くや虫十匹 閑虫



エンドウゾウムシ (体長4ミリ)

友人は多く、職業、趣味、年齢などバラエティーに富んでいる。

その中の一人のご夫人は、昆虫より脚が二本多い蜘蛛が好きで大変お詳しい。樹木も詳しい。そんな方ですから、一緒に里山歩きなどすると勉強になる。数年前のこと、その方から書留が届いた。開けると、揚句のような次第で、この虫の名前が知りたいと、手紙にあった。

調べるために器に入れ、ルーペになっている蓋から覗き、判ったので電話で返事をすませ、やりかけの仕事をしているうちに虫の事をすっかり忘れて、数日経って気付いた時元気であるし、えんどう豆の害虫でもあるからちよつと残酷な実験を思いつき、そのまま放ったらかしにして又失念してまった。次に思い出したのは三ヶ月後であった。容器を覗いてびっくり！生きているではないか。飲まず喰わずで三ヶ月、脱帽である。

アブラゼミ

アブラゼミに関しては皆さんもおなじみでしょう。左は羽化の最終段階です。脚もしっかりして来ましたがもう間もなくお腹を殻から抜いて翅が伸びるのを待つだけです。でも翅が伸び徐々に色が変わり、堅くなるまでには、数時間掛かります。羽化の始まりは夜が多く飛べるのは翌朝になります。二枚の写真を見ながら一句詠んでみてください。



じりじりといや増す暑さ蝉の声 閑虫
ミを伸ばすミンミン蝉の不平聴く 同
法師蝉近付けばぐずぐず文句云い 同

ヤブ蚊

揚句に詠みこんだ「蛇蝎・蜘蛛
百足は昆虫に含まれていない。
つまり昆虫の中では唯一ヤブ蚊
が嫌いなんです。

それは、知らぬ間に人にたかり
、吸血し、強烈な痒みを残して
逃げるから、嫌なんです。

痒みが問題で「僅かばかりの血
などは呉れてやるから、痒みは
残すな！」と怒鳴りつけたい。

イエカの痒みなどは我慢の範囲
であるが、ヤブ蚊はたかられた
だけでも痒みをおぼえ気が狂い
そうになる。叩いてつぶした後
に残る、黒い燐粉そのものに痒
みを与える毒があるように思う

下の画像は誰かさんの脚に停ま
ったヤブ蚊に気付かないでいる
ので、そのまま脚を動かすなど
言って、カメラをとって来るま
で我慢してもらい撮った貴重な
ショットである。

昆虫の中にはもっと危険な大型
の蜂、毒蛾などもいるが知識が
あり気をつけていればめったに
被害は受けない。

ゴキブリなどはたくさん飼った
こともありお馴染みで、少しも
嫌ではない。



蛇さそり 蜘蛛百足よりヤブ蚊嫌 閑虫

アサギマダラ

ここ数年アサギマダラの渡りについてテレビ報道が度々あつて、話題になり関心が持たれるようになった。蝶の姿は画像のような美しい色彩をしている。沖縄から信州の標高二千米以上、そして東北地方まで分布している。

にもかかわらず、秋になると日本列島を徐々に南下沖縄、台湾までも渡った固体が確認されている。

テレビ報道のおかげでアサギマダラの好きなフジバカマを作る人も多く、渡りの中継地として大町近辺は、蝶と人で大変賑わっている。写真を撮る人、捕獲して、地名日付などマーキングをして放蝶する人たちである。このような方法で、渡りのコース、所要日数などが少しずつ判ってきているが、渡りの目的、そのエネルギーに関しては未だ解明されていない。

優雅な飛翔と言ってもよいが、弱弱しいとも言える飛び方で、沖縄、台湾で発見された記録もあるから、大海原を二千キロも渡る事が証明されたことになる。





「日光」とマーキングがある

数年前その中継地で左の画像を収めた。日光とマークされている。推定であるがこの後安曇野を南下、静岡辺りへ出て、海岸線伝いに西下、九州を南下、島伝いに沖縄というコースを行くのであろう。

信州でさえ繁殖可能なことは確認されているのに、ご苦労な事ではあるが、先祖の故郷へ本能的に里帰りをしたのであろう。

秋高しアサギマダラの里帰り 閑虫



左の、高級なヒスイの細工物を思わせる画像はアサギマダラの蛹。

サイズは二センチほど。ちょうどイヤリングに最適なサイズであるが、このイヤリングに負けない美女は、残念ながらいないと断言してもよい。

蠍

カマキリと言えば、終わったあと雌が雄を食べてしまうと言う事に話題は行き着くようだ。

話がそのあたりで私に振られる。私が常にそんな事ばかり観察しているとでも思っているのか。しかたなく観察例から話をする。

「喰われずにするりと逃れ夏涼し」 閑虫

と言うわけで必ず喰われてしまう訳ではないと話をする、わが意を得たりと 顔がほころぶ。しかし、ちよつと待った

「蠍の恋ならぬまま喰われけり」 閑虫

その前に食われてしまうこともあると話した途端に表情は複雑に。

昆虫多しと言えど、カマキリほど自由に頭だけを動かせる昆虫は他にはいない。

強いて挙げれば、スズメバチ、アシナガバチくらいか、それでも振り返るまでは出来ない。

「蠍を預言者とよぶ人目青し」 閑虫

英語圏では預言者に見立て、マンティスとよんでいる。



頭頂の赤い三ツ星は単眼。預言者にも哲学者にも
ならず者にもなぞらえそうです。



電車から降りたら足元に。撮ろうと近付いたらこちらへ顔を
向け睨みつけた。お食事中。召し上がっているのはカメムシ

ツユムシ

よく知られている唱歌「虫の声」には、スズムシ、マツムシ、コオロギ、ウマオイ、クツワムシの五種類が登場するが、ツユムシは登場しない。それは鳴き声が音楽的でないからだと思っている。

確かに、「ジー・ジー」と非音楽的な声なので仲間に入れてもらえなかったのであろう。

しかし、その姿、形、色彩は美しく、好みではツユムシを筆頭に置く。

ツユムシの長い後脚は旧すぎるがマレーネデートリツヒの脚線美を思い浮かべてしまう。連鎖的に物憂い歌声まで耳に蘇ってくる。

昔、列車の窓の開閉が出来る頃は窓からいろいろな虫が飛び込んで来たもので、ツユムシなども秋の常連客であったが近頃は無い。虫好きにはちよつと味気ない。

「ツユムシやデートリツヒの懐かしく」

戦後、女性の肢が長くなり脚線も美しくなった。数年前虫とは関係なく詠んだ句である。

「おしげなく長き肢行く麦の秋」閑虫



ムクゲの花のツユムシ

カントアン（邯鄲）

邯鄲の音色を聴くことは、難しい事ではないが姿を見ることはちよつと難しくなる。当然だが写真撮ることは更に難しい。そして、鳴いているところを撮るとなると更にハードルは高くなり、何十年も撮っていて満足できるショットが無い。



写真（上）はシャッターを押す寸前まで鳴いていたが鳴き止み翅を閉じてしまった（下）は思いもかけず撮れた交尾の場面である。

著名な俳人の句に

「邯鄲の粗末なる蟲の鳴きにけり」

という何とも粗末な句を目にし邯鄲の姿を見た事があるのだろうかと首を捻ってしまった。抗議の意を示し

邯鄲の纏う薄絹十萬兩」と戯れ句

を詠んでみたが腹立ちは収まらない。

「屋台酒肩に邯鄲贅極む」閑虫

これは、松本市内での実際の体験から生まれた句です。

昆虫の越冬

昆虫の世界に入って数年間、東京近郊の雑木林などの、越冬昆虫を捜し求めて歩き回った。そして、さまざまな虫たちの越冬を目撃した。

後に「ふゆのむし」という題で物語を書き、福音館から絵本になって出版された。(一九六九年)
数年前復刻版が出され未だに読み継がれている。
作者冥利に尽きる。

下の絵はその一頁である。
多くの昆虫たちは越冬場所を捜し求め、結果的に集団で越冬するようだ。下の図は数種類のテントウム虫が殆どで他の虫は混じっていないかった。

それは見事な光景で五十年経った今でも目に焼きついている。その後、このような越冬大集団にお目にかかったことがない。カメラを持たぬ時代であった事が悔やまれるが、この絵を描いて下さった三芳悌吉氏に出会えたことは何にも替えられない心の宝である。



ものがたり絵本「ふゆのむし」では
成虫で越冬する虫ばかりが登場しますが
昆虫は、種によって決まっています。卵、幼虫、
蛹、成虫のいずれかのステージで越冬します。
例えば、シジミチョウの多くは卵
モンシロチョウ、アゲハなどは蛹で、また
カミキリムシ、コメツキムシなど幼虫で越冬
するもの、さまざまです。

冬ざれや

樹皮下に万の

天道虫 閑虫



フユシヤク

日本に生息すると言われている凡そ五千種の蛾の中に僅か三十種ほど、冬季出現し活動する変わり者の蛾がいる。

フユシヤクと呼ばれる仲間、メスは翅を半分くらい失くした者から全く無いものまで、段階的に存在している。

体表面積をより小さくする事によって奪われる体温を、より少なくしているわけである。

一方オスは羽を失うことなく自由に飛び回り雌雄の出会いを、充分可能にしている。

この天邪鬼、を知ったのは、たまたまフユシヤクの研究者の助手として随って、二三年ほど、当時まだ僅かに東京近郊に残されていた雑木林、小金井公園狭山ヶ丘・清瀬付近を歩き回り、多くのフユシヤクに出会うチャンスに恵まれたからで、さもなければ知ることはなかったかもしれない。

そんな経験があったから後に、多くはないがカメラ

に収めることが出来た。

次頁の写真がそのショットの中の一点で、クロテンフユシヤクの雌雄がめぐり会った貴重な画像である。

その前に、直ぐ左はメスの全体像



メスのこの形から英語圏ではスパイダー・モス
(蜘蛛蛾) と呼ばれている。



上向きに止まっているのが翅無しメス。
下向きの翅がオス。交尾中の貴重なショット。

翅を捨て凍て凌ぐ蛾の健気なる
冬ざれに仲むつまじき天邪鬼

閑虫
同

温泉猿



一昔前、友人に温泉猿の写真を頼まれ、無いと断ると絵を描いて欲しいと言われパソコン画で挑戦、その絵である。

自画像ですか？などと、からかわれるが私も気に入っている。

自画像と揶揄されて尚自画自賛 閑虫

猿が温泉に入る文化を持ったのは、地獄谷温泉での目撃が初であるから一九六四年のようだ。やや半世紀になる。

温泉の味を占めたり冬の猿 閑虫

雪の華凛とした貌ボス猿か 同

寒雀

今年も寒雀が写真のように群れて来ていない。何の加減なのか判らぬが、毎年まちまちである。

寒雀はふつくとしていて、ふくら雀とも呼ばれ俳句の世界で冬の季語として人気があり多く詠まれているが、姿、動きの愛らしさを表現した句で溢れている。

それだけに類想類句の洪水で食傷するほどだ。私の少年時代は食料難で動物蛋白も買えない時代であった。

寒雀をパチンコや、箆で罌を仕掛け捕って、台所へ動物蛋白供給の役を受け持っていたので「寒雀」といえば真っ先に思い出すのは、そのことである。

詩情も、へったくれもない時代であつたから仕方がない。

しかし、揚句も、前文無しで読めば、季語「寒雀」で切れるので、中七・下五で表現された景は別で、和やかな夕餉の情景であるから、解釈は変わってくるのであろう。

とすれば、長い拙い前文は別として、前書きの有無で句の意味が全く変わってしまうのも、俳句の面白味である、と言うような文を物の本で読んだ記憶があるので、これでよいことにした。

寒雀夕餉にぎわい舌鼓 閑虫



凍とんぼ

俳句の世界では凍蝶、凍蜂はあるようだが、凍とんぼは見当たらない。

凍蝶・凍蜂という言葉はあるが、実際には低温になって動きが頗る鈍くなった蝶や蜂を詠んだ句であって、実際に、凍ってしまった蝶や蜂を詠んでいるわけではない。しかし、私のような虫屋は実際に見て知っています。

長年通っていた山小屋は標高一八〇〇でしたから、早い年は十月末には降雪があり、気温も零下になる。毎年五月初旬から十月初旬までの間に数回通っていたが、たまには雪の時期にもと、思い立って出かけた。部屋に入ると、オツネントンボが先客としていました。翌朝、見るとガラスは凍り窓枠には真っ白に霜そしてそこに、昨日元気だったオツネントンボが窓ガラスに凍って張り付いていました。

石油ストーブをつけ部屋が暖まってくると徐々に、トンボは解凍され動き出し、飛べるようになり布団の襟カバーに飛んできました。

凍とんぼ

解凍されて

枕辺に 閑虫

オツネントンボとは越年トンボという意味ですから元々寒さには強く、冷蔵庫に一日や二日入れておいても死ぬ事はないのです。

こんなトンボが日本には数種います。



窓辺で凍って仮死状態のオツネトンボ



解凍され元気に目覚めました



制作 アトリエ・フジイ

発行日 2015年2月吉日

制作・発行アトリエ・フジイ

長野市川中島



写真と文と俳句



アトリエ・フジイ